

佳作

当たり前ではないから大切に

熊本県熊本市立出水中学校二年 井上実咲

いつからだろう。毎日、家族がいて朝、「おはよう」と言うのと返してくれる存在がいることに「当たり前前」と思うようになったのは。

夏休みになった。毎年、変わらず母の実家へ行く。しかし今年は、いつもと違うことがある。

朝、私は起きて、まだ眠い目をこすりながらリビングへと向かう。

「ばあちゃん、おはよう。」

「あら。今日は早いね。おはよう。」

と椅子に座った祖母が答えた。今までなら、祖母の声の後に「おはよう。顔、洗ってきなさい」と優しい声で話しかけてくる人がいた。そう、これが今年の夏と去年までの夏との違いだ。祖母の後に続く声は無く、庭にいる蝉が鳴いているだけだった。

私は祖父の部屋に入った。人の気配が一切無い静

かすぎる部屋。祖父の写真の前に座った。静寂を破るように独り言を言っていた。

「もっと話しておけば良かった。」

過去の後悔。いくら喋りかけても返事は無い。何でもっと、一緒にいられる時間を大切にできなかったのだろう。距離が離れていても、必ずどこかにいる。いなくなるなんて無いと、ずっと逃げていたのだろう。そんなことを考えていたら、祖父との最後の会話を思い出した。

「これ、あげるよ。」

たった一言。いつもと変わらない優しい声だった。差し出された手には、水色の、ひょうたんのキーホルダーがあった。受け取るか迷ったが、素直に、「ありがとう。大切にします。」

と答えた。キーホルダーについていた鈴が「チリン」と鳴った。その鈴が私には「どういたしまし」と祖父が言ってるように聞こえたのだった。

今、思い返すと、話せる場面はたくさんあった。後ろを振り向くと、いつの間にか祖母が座っていた。私が驚いていると祖母がこんなことを言った。

「今を大切に。あなたが関わっている人達との時間を大切にしながら生きていきなさい。全部、当た

り前なんかじゃないからね。」

この言葉で自分の考えが変わった。もっと、たくさんの人と話し、関わっていかうと。もう二度と同じ後悔はしたくないから。「おはよう」たったの四字だけでも大切にしていかうと思う。

「じいちゃん、これからは関わってる人との時間を大切にする。好きな人、苦手な人、関係ない。だって皆、誰かに大切にされて生きてる。それに気づかせてくれて、ありがとう。」

そう、写真に語りかけると、私の手に握られていたキーホルダーが「チリン」と鳴った。